

目梨泊漁港先岩場におけるカモメ類繁殖数の推移

村山良子¹⁾・朝倉克美¹⁾・笠井淳彦²⁾・神尾恵美子²⁾・齋藤光行¹⁾・杉本修⁴⁾
仲沢真紀子³⁾・馬場佳隆⁴⁾・廣瀬英子³⁾・渡部恵子²⁾・小川隼央⁵⁾・半田祥夏⁵⁾・高島孝宗³⁾

¹⁾ 枝幸町文化財保護委員会・²⁾ ミュージアムボランティア
³⁾ 枝幸町教育委員会・⁴⁾ 北海道枝幸高等学校・⁵⁾ 枝幸しょうねん隊

はじめに

枝幸町で観察できるカモメ科の鳥類としては、ウミネコ *Larus crassirostris* や、オオセグロカモメ *Larus schistisagus*、シロカモメ *Larus hyperboreus* などがあり、このうち前二者については町内での繁殖が確認されている。枝幸町では町内北部の目梨泊地区と同南部の音標地区に繁殖地があり、前者についてはウミネコ、後者についてはオオセグロカモメを主体としている。

このうち目梨泊地区の目梨泊漁港先岩場繁殖地については枝幸町教育委員会が1982年から継続的な調査を実施している。調査結果はカモメ類繁殖地の長期間にわたる変化を知る上で数少

ない資料となっており、ここに報告するものである。

なお、本稿は日本野鳥の会道北支部副支部長を務める村山良子の指導のもと、枝幸町教育委員会社会教育課オホーツクミュージアムえさし職員の廣瀬英子が調査結果をとりまとめ、同学芸員の高島孝宗が執筆した。

調査地点

調査対象となる繁殖地は、枝幸町北部の目梨泊地区、目梨泊漁港よりオホーツク海に突き出す岩礁上に位置する(図1.)。岩礁は本来、海岸から連続するものであったが漁港造

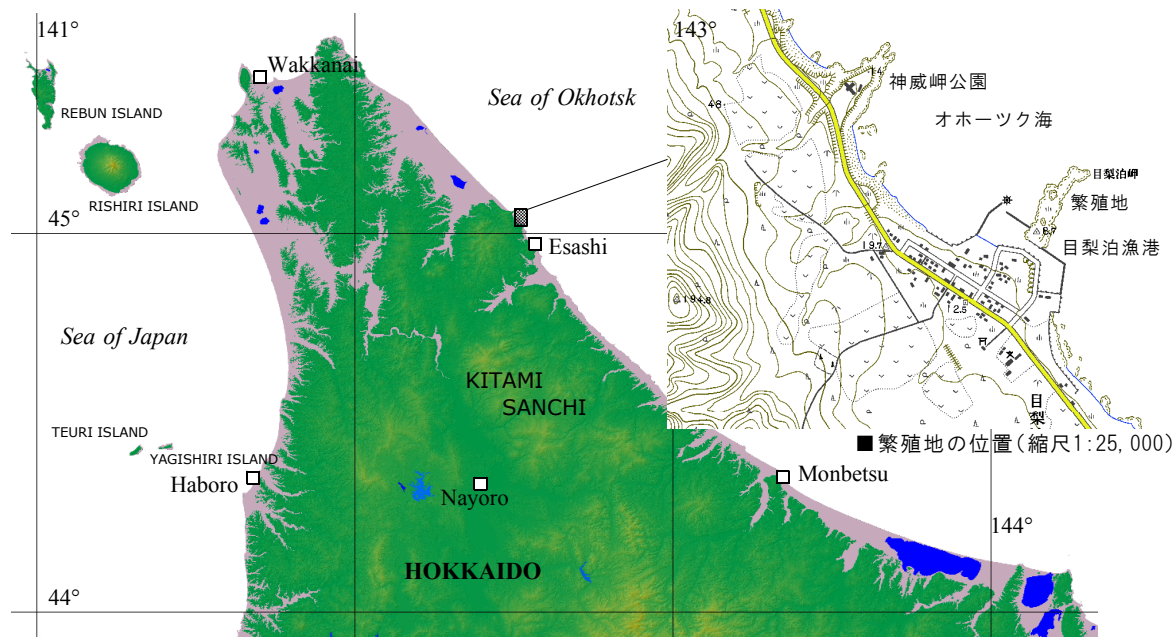


図1. 枝幸町とカモメ類繁殖地の位置

成工事のために切り離され、現在は防波堤によって接続している。岩礁の軸方向は北西-南東となっており、岩礁基部に近い南西側に頂部を有し、標高約5mを測る。頂部付近にはわずかながら土壌の形成が見られ、オオイタドリやクマイザサ、オオヨモギ、灌木のエゾニワトコなどが繁茂している。

岩礁はいくつかの起伏を経ながら北西方向に向かって傾斜しており、先端部では岩が露出した状態となっている。携帯型GPSによる測位では、北緯45.02.15.4/東経142.31.01.5(枝幸郡枝幸町目梨泊)を測る。なお、岩礁頂部付近では調査員の一人である神尾が黒曜石製搔器を表採しており、縄文時代中期の遺跡が地下に存在する可能性が高い。本繁殖地の周辺にはオホーツク文化期の集落遺跡である目梨泊遺跡を始めとして縄文時代早期から近世アイヌ文化期に至る多くの遺跡が密集している。

調査方法

調査は繁殖地をAからKまでの11の区画に分割し、各々の調査区を担当する調査員を定めて、調査区ごとに営巣数と産卵数を目視により確認しカウントした。なお、調査は卵の大きさの違いからウミネコとオオセグロカモメとに分別し記録している。産卵の認められない「空巣」については本繁殖地の大半を占めるウミネコによるものとして集計している。

調査は枝幸地方においてカモメ類がほぼ産卵を終える6月初旬に設定し、今年度は平成20年6月5日に区画設定、6月7日に本調査を行った。区画設定は朝倉、神尾、仲沢、高島が行い、本調査には村山、朝倉、笠井、神尾、齋藤、杉本、馬場、廣瀬、渡部、小川、半田、高島の12名が参加した。

調査結果

(1) 営巣・産卵の状況

繁殖地は起伏に富んだ岩礁に位置しており、部分的に土壌の堆積が見られる。ウミネコを中心とするカモメ類は、岩肌にできたくぼみなどを利用し、枯れ草や海藻類、羽毛などで作った直径20cmほどの円形の巣を構築している(写真1.)。ウミネコの卵は鶏卵よりもやや小さく、

それよりも大きなオオセグロカモメの卵との識別は比較的容易である。

卵の表面は淡い灰褐色から茶褐色を呈し、その多くは褐色の斑点に覆



写真1. ウミネコの産卵状況

われている。多い巣の場合、5個～6個を産卵する場合もあるが、今年度の調査では1個～2個を産卵した巣が大半で、4個以上産卵された巣を確認することはできなかった。

種名	営巣数	産卵数	平均産卵数
ウミネコ	285巣(a)	223個(c)	0.78個(c/a)
オオセグロカモメ	6巣(b)	4個(d)	0.67個(d/b)
2種合計	291巣(a+b)	227個(c+d)	0.78個

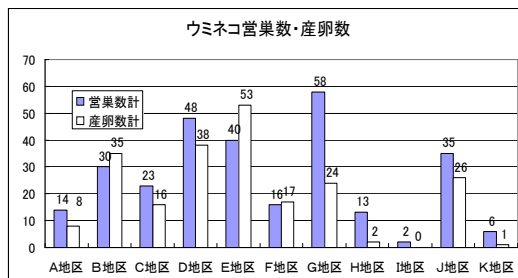


表1. 上/ウミネコ・オオセグロカモメ営巣数・産卵数集計
下/ウミネコの営巣数・産卵数の地区別集計

平成20年度は、ウミネコとオオセグロカモメの2種合計で営巣数は291箇所、産卵数は227個を確認するにとどまった。空巣が多かったため一腹卵数は1.0を割り込み、0.78個となっている(表1.)。

空巣については識別が難しいが、ウミネコが営巣した可能性が高いものと推定し集計している。空巣が多いため、正確な分析は困難だが、本繁殖地におけるウミネコの占有率は、285巣(ウミネコ営巣数)/291巣(2種合計営巣数)により、97.9%に達する。ウミネコが優先的に占地する傾向は本繁殖地の特徴となっている。

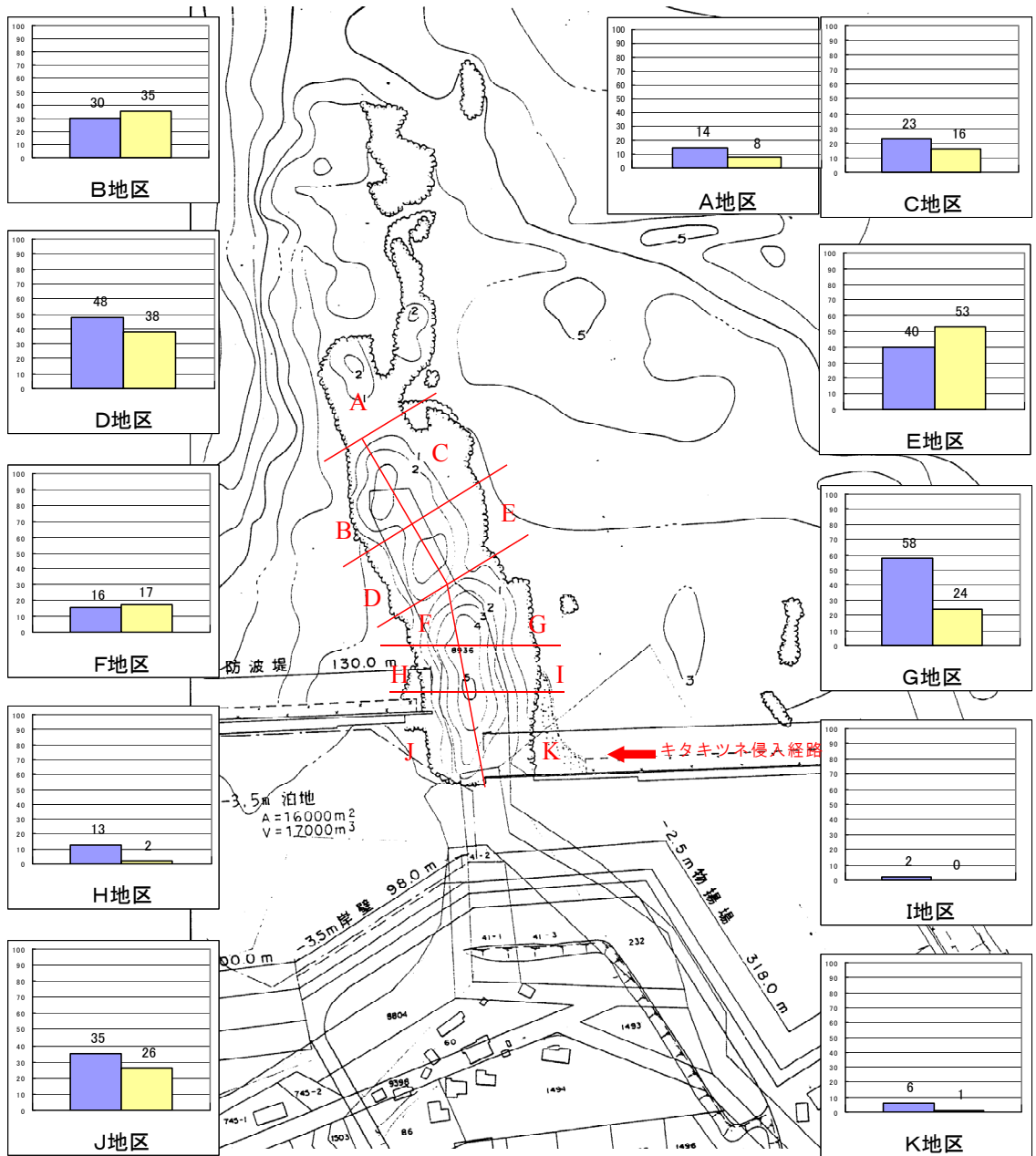


図2. 平成20年度の目梨泊漁港先岩場繁殖地におけるウミノコの営巣分布（棒グラフ左が営巣数，右が産卵数）

繁殖地内の各調査区におけるウミノコ営巣数、産卵数を図2. に表した。調査区は岩礁の長軸線に沿って二分割し、さらに長軸線に直交するように細分している。調査区の設定方法については調査を開始した1982年以降、変更を行っていない。

岩礁の南側斜面に位置するC, E, G, I, Kの各区に比べ、北側斜面に位置するB, D, F, H, Jの各区の方が営巣数、産卵数ともに多くなっている。本繁殖地は北側斜面で急角度に立ち上がっており、ウミノコの営巣により適しているのかもしれない。今年は例年一定の営巣、

産卵が確認されるI区、K区での減少が著しい。両区での減少の要因としてウミネコの卵を狙うキタキツネによる食害が考えられる。キタキツネによる食害は数年前から顕著になっており、防波堤に侵入防止フェンスを取り付けるなどの対策を講じているが、図2. に示したようにキタキツネは防波堤海側に設置された消波ブロックを伝って侵入していることを確認しており、効果的な侵入防止策がないのが現状である。G区において空巣が際だって多いことも、キタキツネによる食害をうかがわせる。

例年6月初旬には早い個体は孵化が始まるが、今年度の調査では孵化個体を確認することができなかった。村山の観察によれば多くの親鳥が夜間の抱卵を放棄した状態にあり、今シーズンの繁殖はほぼ絶望的と思われる。

(2) 営巣数・産卵数の推移

本繁殖地における1982年（昭和57年）以降の営巣数・産卵数の推移を表にまとめた（表2. 3.）。1987年（昭和62年）以前の調査ではウミネコとオオセグロカモメの区分を行っていないが、当初から2種が存在していたと推定されるので、統計は合計値として扱っている。

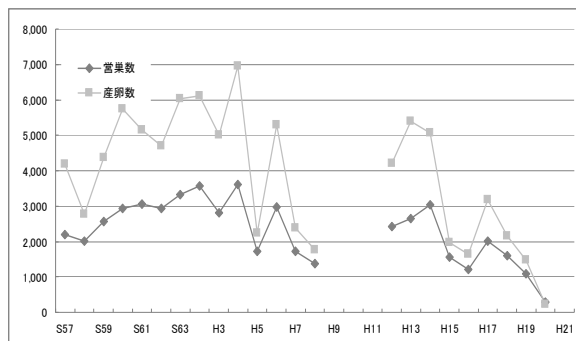


表3. カモメ類の繁殖数の推移

カモメの繁殖数（営巣数・産卵数）は数年の周期をもって増減を繰り返しているが、1992年（平成4年）以降、キタキツネによる食害が顕著となり、1997年（平成9年）まで混乱が続いた（村山, 2001）。1997年には枝幸市街地にほど近いウスタイベ千畳岩に繁殖地が移動したが、やはりここでも食害にあっている。翌1998年（平成10年）には繁殖数は劇的な回復を見せたが、天候

不順によって現地調査を実施できなかった。

また、続く1999年（平成11年）についても強風によって現地調査が実施できず統計上は空白となった。

1998年の回復について村山は、同年1月に目梨泊地区で3頭のキタキツネの死骸が発見されたことを指摘し、天敵であるキタキツネの動向に影響を受けていることを示唆している（村山, 2002）。

なお、1998年は本繁殖地としては初めて100羽のウミネコ幼鳥にカラーリング（緑色）を装着している。

2000年（平成12年）以降は、2002年（平成14年）に最盛期に近い繁殖数を記録するが、その後は漸減傾向にある。2005年（平成17年）に一時的な回復を見せるが、その後は急激な減少の一途をたどり、ついに今年度の調査では営巣数、産卵数ともに最盛期の一割にも満たない水準にまで減少したことが判明した。

繁殖数の減少の原因としてはキタキツネ等による食害が考えられるが、詳細は不明である。この減少傾向が今後も続いた場合、早晩、この繁殖地そのものが解体、消滅する可能性が高いものと考えられる。

本繁殖地での減少の原因、背景の究明が急務と思われる。

調査年度	営巣数	産卵数
昭和57年	2,204	4,181
昭和58年	2,001	2,773
昭和59年	2,567	4,361
昭和60年	2,928	5,750
昭和61年	3,049	5,147
昭和62年	2,928	4,706
昭和63年	3,325	6,030
平成2年	3,567	6,114
平成3年	2,811	5,015
平成4年	3,614	6,946
平成5年	1,726	2,240
平成6年	2,974	5,295
平成7年	2,728	2,377
平成8年	1,366	1,757
平成9年		
平成10年		
平成11年		
平成12年	2,417	4,209
平成13年	2,655	5,385
平成14年	3,034	5,075
平成15年	1,553	1,962
平成16年	1,212	1,642
平成17年	2,008	3,173
平成18年	1,598	2,157
平成19年	1,085	1,482
平成20年	291	227

表2. カモメ類の繁殖数の推移

目梨泊繁殖地のウミネコの移動状況

ウミネコは広範囲に移動することが知られており、小杉和樹を中心としたカラーリングおよびウイングタグの装着による移動状況の調査が続けられている（小杉，2002）。今回の調査でも調査員の一人である廣瀬が足環を装着した個体を確認、撮影したが、カラーリングはなく、詳細は判別できなかった（写真2.）。

本繁殖地では、1998年から2001年までの4カ年にわたり、毎年100羽、計400羽のウミネコ幼鳥にカラーリングを装着し、放鳥している。枝幸町目梨泊を示す本繁殖地のカラーは緑色である。



写真2 足環を装着されたウミネコ

小杉の調査の結果、本繁殖地を巣立った個体が、1998年には斜里町カムイワッカ付近、小樽市小樽運河、1999年には網走市網走川河口左岸、能取湖畔卵原内、浜益村昆砂別、余市町浜中海水浴場、古平町、2000年には芭露漁港、湧別川河口、豊頃町大津漁港、斜里町ウトロ、積丹町積丹川河口、枝幸町枝幸港、2001年には京都府宮津市江尻漁港、利尻島ポロフンベ、紋別市渚滑町の各地で確認されている（小杉，2002）。

本繁殖地で生まれたウミネコは道内はもとより遠く京都まで移動しており、その範囲はきわめて広い。

繁殖地の移動と今後の展望

前述したように、本繁殖地のウミネコは、キタキツネによる食害が深刻化した1997年に枝幸市街地北東のウスタイベ千畳岩に移動し、一時的に繁殖地を形成したことがある。今年度の営巣数・産卵数の激減は1997年当時の減少率を大きく上回るものであり、今後ふたたび、繁殖地の解体ないし移動が起きる可能性が高い。

利尻島におけるウミネコの繁殖状況を継続的に調査している小杉和樹は、島内で繁殖地が移動する要因として、オオセグロカモメとの関係と繁殖地環境の悪化を上げている。また、繁殖

地環境の選好性として基本的に岩地を好み、岩地が飽和状態になると草地に営巣することを指摘している（小杉，1991）。

本繁殖地の場合、オオセグロカモメとウミネコとの関係は、後者が圧倒的に多い傾向が持続しており、その関係性に大きな変化はない。ただし、枝幸地方ではオオセグロカモメの繁殖地である音標ゴメ島で増加傾向が認められるため、ウミネコの繁殖に何らかの影響を与えている可能性はある。また、本繁殖地ではウミネコの繁殖数の推移と反比例するように植生の後退と回復が繰り返されている。営巣数・産卵数の減少の背景にはキタキツネ等による食害をふくめた複合的な要因を考慮する必要がある。

本繁殖地での営巣数・産卵数が激減している一方、利尻島の繁殖地では1998年の調査開始以来、推定個体数は増加傾向にあるとされる。この背景として、枝幸を初めとする不安定な状態にある他地域からの移入個体の増加が指摘されている（小杉・杉村・佐藤，2005）。

おわりにー地域学習としてのカモメ調査ー

枝幸町教育委員会では1982年以降、本繁殖地での継続的な調査を行っており、調査の主体は同委員会の職員が担ってきた。1999年の資料館施設「オホーツクミュージアムえさし」の開館以後は、同館の調査研究事業として引き継ぎ、2006年以降は北海道枝幸高等学校のボランティア組織「枝幸しょうねん隊」を調査の主体に迎えている。さらに近年では枝幸町文化財保護委員会やミュージアムボランティアを加え、町民主体による調査活動へと変貌している（写真3.）。

枝幸町では利尻島とは事情が異なり、ウミネコによる被害が深刻化した例が少ないため、町民のカモメ類（ウミネコ）に対する意識や関心もそれほど高いものではない。枝幸町の町鳥は「カモメ」と制定されているが、町内で夏季カモメ（*Larus canus*）を目にする機会ほとんどないので、オオセグロカモメやウミネコを総称して「カモメ」「ゴメ」と呼んでいる。枝幸町民にとっては「カモメ」は身

近な存在ではあるが、その生態や繁殖地の存在についてはあまり知られていないのが現状ではなかろうか。こうした状況にあつて、地域の将来を担う高校生や学校教職員、町民主体による調査活動は、それ自体が地域の自然を再発見し、野生動物の営みを知るまたとない学習機会となったと考える。

枝幸町教育委員会（オホーツクミュージアムえさし）では、この貴重な繁殖地をできるだけ存続させるために、漁港を管理する稚



写真3. 繁殖調査の状況

内土木現業所歌登出張所頓別事業所に協力を要請し、侵入防止ネットの設置など、キタキツネによる食害を防ぐ対策を講じてきたが、思うような効果を上げることができていない。

本調査の目的は繁殖地の消長を記録することにあるため、現段階ではこれ以上の対策を講じる計画はないが、今後も本繁殖地の推移を注意深く見守っていきたい。

本稿は日本野鳥の会道北支部副支部長の村山の協力を得て、枝幸町教育委員会社会教育課オホーツクミュージアムえさし学芸員（考古学）の高島が執筆したが、専門外の分野のため手探りの状態での調査、報告を行っている状況にある。一方で25年以上の長期にわたって一つの海鳥繁殖地を調査し続けた例は数少ないと聞く。枝幸町におけるカモメ類調査の成果は、村山による一連の報告（村山，1999・2001・2002）をのぞき、これまで一般に公開していない。この貴重な調査結果を専門の研究者による本格的な調査の基礎資料として活用されることを願って本報告をまとめた次第である。

最後に悪条件の中、調査に従事していただいたボランティアの各位と枝幸高等学校の生徒のみなさんに厚く感謝申し上げたい。

参考文献

- 小杉和樹，1991；利尻島におけるウミネコの繁殖地．利尻研究10
- 小杉和樹，2002；ウミネコの移動状況について．平成13年度海鳥と共生する地域づくり事業報告書．北海道宗谷支庁
- 小杉和樹・杉村直樹・佐藤雅彦，2005；利尻島におけるウミネコの集団繁殖地について（1）．利尻研究24
- 村山良子，1999；枝幸町におけるウミネココロニーの動向．平成10年度海鳥と共生する地域づくり事業報告書．北海道宗谷支庁
- 村山良子，2001；枝幸町目梨泊コロニーのウミネコ等の繁殖状況．平成12年度海鳥と共生する地域づくり事業報告書．北海道宗谷支庁
- 村山良子，2002；枝幸町目梨泊コロニーのウミネコ等繁殖調査報告．平成13年度海鳥と共生する地域づくり事業報告書．北海道宗谷支庁